

もうひとつのガン

最後の五日間、愛と相剋の中で

直原清夫



もうひとつのガン 直原清夫
最後の五日間、愛と相剋の中で

著者略歴

直原清夫（なおはらよしお）

大正13年岡山市に生まれ、神戸に育つ。
地方新聞記者を経て、昭和39年以降通信
社を経営。

戦前の音楽資料を収めた同人雑誌「SP
レコード」誌主宰。

もうひとつのガン

最後の五日間、愛と相剋の中で

昭和54年4月25日 第一刷発行

八八〇円

著者 直原清夫

発行者 江口克彦

発行所 P H P 研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
TEL 〇七五（六八一）四四三一

印刷所 東洋印刷株式会社
製本所 合資会社村上製本所

序

昭和51年12月26日、午後1時35分、東京のある癌専門病院で、妻を乳ガンで死なせました。享年44歳。

ひところは「妻は乳ガンで死にました」と言っていたのですが、やがて、そうは言えなくなったのです。

死別の悲しみが薄れて心がクールになるにつれ、対応次第で死なずに済んだはずだし、よしんば死は免れなかったとしても、もっと安らかに永眠できたはずだと考えるようになったからです。

どうしてあの時、あんなことをしてしまったのか。何故、あんなへまをやらかしてしまったのか……贖罪と悔恨の念で「妻の死」を冷徹に見直してみようと決心しました。

S F映画まがいの心象風景が浮かびます。

人間はみんな透き通って見える薄墨色をしたシルエットになっています。と、一つのシルエットの胸や腹などに、赤い点がポツンとできます。そして、この赤い点に気づいた周りの人達にも、気づくと同時に灰色のしみが胸にできます。

赤い点が次第に広がってシルエットを塗りつぶすと、燃え尽きるようにシルエットは消え失せてしまいます。しかし、周りの人達にできていた灰色のしみはなかなか消えません。ですから、赤い点の治療に従事する人達は、灰色のしみが重なり合って黒く爛れて^{ただ}います。

しみは、かなり感情や思考に影響を及ぼしているのですが、自分にそんなしみができていることに気づかぬ人も少なくありません。赤い点のできた人の家族の中にすら気づかぬ人がいるぐらいです。

赤い点を撲滅するには、灰色のしみの存在に着目し、しみを抜き取る努力も必要のようです。たまたましみが抜けた人は、憑物が落ちたように我に返り、その必要さを痛感します。

赤い点をガンとするなら、灰色のしみは――

私は、“もう一つのガン”と呼ぶことにしたのです。

もうひとつのガン／目次

序	1
---	---

第一部 最後の五日間

「大丈夫よ」	11
「私、死ぬの!？」	18
「皆にお茶を……」	25
浴衣	34
「イ、チ、ゴ、タ、ベ、ナ、サ、イ」	43
「ああ、おいしい!」	55
「やめて、もうやめて」	63
口紅	73
「よかった、知らないで」	83

第二部 白衣

主治医 93

看護婦 110

付添婦 122

第三部 どうして

手遅れ 143

無関心 148

相剋 162

打算 173

限界 185

第四部 悔 恨

「やっぱり……」……………200

真っ赤な柿……………212

「ありがとう」……………217

「帰りたい」……………222

「もういいません」……………228

「くやしいわ」……………235

後 記……………237

付記 人間として……………241

あとがき……………254

もうひとつのガン

——最後の五日間、愛と相剋の中で——

第一部

最後の五日間

破れた小さな錫箔のカプセルを大事にとってあります。私が妻に飲ませた睡眠薬が入っていたのです。私が妻にしてやった最後の行為でした。夫婦の最後のかかり合いを記念するものです。

妻は、やがて安らかな寝息を立て、首をガクンと折り、頭を枕からずり落として深い眠りに入り、もう二度と目覚めることはありませんでした。永遠の眠りだったのです。

破れた小さなカプセルを掌にのせると、病院特有の臭や物音が幻覚となって蘇ります。一つの生命の燃え尽きるドラマが思い出されます。誰もが一度は演じなければならぬドラマでありながら、語られることの少ないドラマ。みんながいよいよ登場し、やり直しのきかない演技をしいられるドラマ。

「ああ、へまをやったものだ」と、やり場のない悔恨と憤懣が、間歇泉のように時として強く胸底から噴き出します。これが、「もう一つのガン」特有の後遺症なのです。あえて人に語ること、噴出の圧力を和らげたいという利己心のあることは否定しません。しかし、「私のようなヘマはしないで、もっとうまくやって欲しい」という謙虚な祈りが、語りたい衝動を強めていることも事実です。

ガンに、吹き消されようとする生命の炎をめぐる「最後の五日間」の生と死のドラマをあからさまに話ししましょう。

「大丈夫よ」

昭和51年12月22日

〔私の看護メモ〕（註）これは医師、看護婦の回診に立ち会ったときに記録しておいた私のメモを中心に、後日、取材させていただいた若干のデータを補足したものです。

6時 酸素吸入五リットルで続行。昨夜はいくらか眠れたようだ。しかし呼吸数四六で努力気味、酸素吸入でも楽にならず、衰弱が著しい。

8時 食事。三分の一を食べただけ。

12時 息苦しそうで、脈拍も微弱になる。顔色土色。体を動かす時右下肢に痛み。両手足が少し冷たい。

17時 食事三分の一ぐらい。

18時 酸素吸入五リットル続行。食後、ひどい呼吸困難に陥ったが、すぐ落ち着いた。脈拍

微弱で顔色は悪い。右下肢の痛みとれず。

20時55分 呼吸困難がひどく努力呼吸。医師の手当てを受ける。

21時50分 手当の副作用か嘔吐す。その後も吐気あり。

22時30分 眠っているが努力呼吸。（呼吸数と脈拍数は共に一分間の数である）

*

病室に入ると真っ先に妻の顔を見るのが習慣になっている。この時は、「ああ、いかんぞ、この顔は」と立ちすくんだ。死相というのだろう。眼窩がんかのくまどりが濃くなり、人相が変わってしまっている。それでも私に気づいて、いつものように「ご苦労さん」と言おうとしても息がつまり、苦しうに顔をしかめた。「何も言うな」と手で制する私に、妻は視線で私の注意を隅のテーブルへ誘う。配膳された夕食の四角い金属の盆に、白い布巾がかけてあった。

布巾をとっておかずを確かめ、妻に微笑を送る。妻も微笑を返す。「あなたの好物でしょう。ちよんどうよかったね」と目が語っている。私は領いて、今度はニッと顔をほころばす。箸をつけるのを見とどけるまで妻はこっちを向き続ける。「これが夫婦の情っていうものだったなあ」と、忘れていたもの、そしていま失おうとしているものを思い出した。べそをかいた顔が見えないように、背を向けて食べた。

病院の給食がほとんど手つかずで残る日が多くなった。私や付添いさんが代わりに食べた。きちんと切り揃え、煮崩れないように調理し、形よく盛りつけ、ひと目みただけで丁寧に作られていることがわかる。大衆食堂での外食にうんざりしていた私は、下品な仲間に突然、礼儀正しい人が加わったようなとまどいすら感じた。

清潔に、正確に配膳される。だが肝心なことが一つ欠けている。おいしく食べさせる思いやりだ。料理する人は誠実に作る、配る人は着実に配る、それぞれの職域では申し分なしだ。せっかくの料理が冷たくなって、食欲をそいでいることは、誰の責任にもならない。

私は妻に代わって食べるたびに「温かいならどんなにうれしいだろう」と残念でならなかった。栄養価を計算し、病人食として完璧な献立であっても、食べてくれなければ何にもならないのに、とはがゆい。

のっけから食べ物の愚痴か、と眉をひそめられそうだから断わっておきたい。冷えた給食にこそ病院の体質、医療のひずみがチラッとのぞいていると考えたものだから、つい筆が滑ったのである。(その後、病棟の各階ごとに電子レンジが一台ずつではあるがセットされ、配膳車もプラスチックのカバーつきになって、大幅に改善された)

ついでだからもうひとこと。

十二月二十四日の夜、と言えば妻が死んだ二日前、そしてクリスマス・イブ。点摘と輸血だけ

で辛うじて生きていた夜の配食に、鶏のものの丸焼きが添えてあった。付添う人への思いやりで、こんなご馳走がサービスされたと付度した。嬉しくなって見舞い客が差入れてくれた小さなクリスマスケーキを、そっくりナースセンターの宿直の看護婦さんにプレゼントした。後日、なんかのほずみで婦長さんに、鶏のものの件を尋ねたことがあった。婦長さんは、ちよっととまどった表情で「とんでもありません。そんな特別なサービスなんか致しませんよ。クリスマスの献立がそうになっていたでしょう」と答えた。死に類した患者に鶏のものご馳走？

*

付添いのMさんの表情は暗いというより陰しかった。ガクンと病状が悪化した妻を励ます術が判らず、口をつぐんでおろおろするだけの私に代わって、Mさんは、「お茶をあげようか」「足をさすろうか」とこまめに声をかける。その都度妻は顔をしかめながら返事をする。顔をしかめるのを、苦しいからだとうけとって、Mさんは一層かいがいしくあれこれ世話をやく。私にいいところを見せようとしているのではない。自分の能力をフルに発揮できる時期到来に勇み立った、と言えば語弊があるが、水を得た魚といった活気が、もうとくに還暦を越した老体ににじみ出ている。絶望感におののく私には、何よりも頼もしく感じられた。『三度目の正直』どおり、Mさんは三人目にやっと巡り会えた付添いさんのベテランである。

だが、やはり齡には勝てず、耳がとおい。自分の立てる物音や声の大きさの見当がつきにくい